



Title	ポストヒューマン・デザインの地平 : ダン・ブラウンの『オリジン』におけるAIと「かぐわしき科学」のゆくえ
Author(s)	渡邊, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2019, 43, p. 29-57
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99430">https://hdl.handle.net/11094/99430</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ポストヒューマン・デザインの地平

## ーダン・ブラウンの『オリジン』における AIと「かぐわしき科学」のゆくえー

渡邊 克昭

### はじめに

ダン・ブラウンの最新作、『オリジン』（2017）が、彼の作品群の中で異彩を放っている<sup>1</sup>とすれば、それは何よりもこの小説を特徴づけているのが、登場人物としての人工知能であるということは、改めて書き立てるまでもないだろう。ほとんどのプロットの展開において周到な狂言回しを演じ、物語を推進する原動力として圧倒的な存在感を示す人工知能、ウィンストン<sup>2</sup>なくしては、この小説は成立し難いと言っても過言ではない。天才的なコンピュータ科学者にして預言者、そしてまた億万長者の未来学者、エドモンド・カーシュが<sup>3</sup>、量子コンピュータを駆使してプログラミングしたこのAIは、ブラウンの読者にはお馴染みの宗教象徴学者、ローバート・ラングドンに幾度となくアクセスし、有能な執事のごとく彼を誘導する。その一方で、「宰相補」“the Regent”を名乗る謎めいた黒幕として「彼」は、セビーリヤ大聖堂で起こったテロで家族を失いトラウマに苛まれる海軍退役提督ルイス・アビラを唆して、カーシュの暗殺に駆り立てる。かと思えばウィンストンは、monte@iglesia.org というアドレスを用いて、陰謀論のサイト、「コンスピラシーネット・ドットコム」に随時、秘密情報を提供し、巧妙な世論操作にも手を染める。こうして「彼」は、カーシュが周到に準備した一世一代のプレゼンテーションをできる限り多くの世界中のネット視聴者の目に晒すべく、創意に満ちた方策を案出せよ（691）という命令を忠実に果たし、予め仕組

まれていたように消滅の運命をたどる。

本稿では、生物的存在としてのホモ・サピエンスと非有機的なテクノロジーとしての AI が分かち難く融合したポストヒューマン時代の到来を視野に入れ、最先端テクノロジーと人類の叡智を接合して創造されたこの AI が、いかなる「アート」を駆使して「かぐわしき科学」の誕生にどのような複雑な陰影を投げかけるのか、本作に描かれた黎明期のポストヒューマン・デザインの地平を明らかにしてみたい。

そこで議論を進めるにあたって、『オリジン』を特徴づける「アート」には、次の 3 つの意味が複合的に含意されていることをまずもって確認しておきたい。ウィンストンが自ら告白するように、「彼」自身の略称が「人工」を意味する「アート」であってみれば (68)、その振る舞いそのものが、人工的に合成された知能のなせる技であるという意味での「アート」。次に、あらゆる情報に通じた AI が、瞬時にしてあらゆる可能性をシミュレートし、最適解を探り当てるのに用いるテクノロジカルな技という意味での「アート」。そして、ビルバオのグッゲンハイム美術館やその内部を彩る様々な現代アート、アントニ・ガウディが心血を注いだ未完の聖堂、サグラダ・ファミリア、さらには彼の邸宅カサ・ミラなど、スペインを舞台とする本作に登場する絵画、造形美術、建築など、文字どおり芸術という意味での「アート」。本稿は、分かち難く絡み合ったこれらの 3 つの「アート」の重層的な作用を解きほぐし、カーシュが突きつけた問いかけ、すなわち人類の起源と人類の運命 (78) について彼が提起する「かぐわしき科学」が、いかにポストヒューマンの光と陰を炙り出しているのか、AI の果たす役割を多角的に浮き彫りにすることにより分析を進めていきたい。

### グッゲンハイム美術館の惨劇

ポール・ゴーギャンのかの有名な絵画のタイトルともなっている、「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」

という、人類をめぐる根源的な問いかけが、本作を骨太に貫く壮大なテーマであることは疑う余地がない。だがこの小説においては、一見補助的なツールに過ぎないように見えるウィンストンの存在それ自体が、人類の趨勢に関わるこの壮大な問いかけにメタ的に応答する重要な鍵として機能していることは注目に価する<sup>3</sup>。人類の起源と未来の運命という、ギリシャ文字で言えば“alpha and omega”（473）に相当するこの究極の難問に絡めて、自らの存在論にもたびたび言及するウィンストンは、ラングドン进行未知のポストヒューマン・デザインへと誘うインターフェイスをなしていると言ってもよい。巨視的に人類史を射程に入れた壮大なヴィジョンを提示する本作において、「彼」が不可視の存在であり、単に人間に奉仕する対面型の人間型ロボット、アンドロイドではない理由もまさにそこにある。

ハーヴァード大学でのかつての教え子、カーシュに請われて、謎に満ちた彼の世紀のプレゼンテーションの招待客として、イベント会場、ビルバオ・グッゲンハイム美術館を訪れたラングドンは、自分用にカスタマイズされたイギリス訛りの AI に骨伝道技術を用いたヘッドフォンを通してはじめて接することになる。英国の宰相ウィンストン・チャーチルに私淑するカーシュは、自らが開発した超高性能 AI を彼に因んでウィンストンと命名したわけだが、当初ラングドンの「彼」に対する反応は、必ずしも芳しいものではなかった。賢しら口の AI に語りかけられ、なんともきみが悪い（74）と不満を漏らす彼に、カーシュは、次のように自らの発明を自画自賛する。“Incredible, right? You can’t believe what I’ve accomplished in artificial intelligence this year—quantum leaps. I’ve developed a few new proprietary technologies that are enabling machines to problem-solve and self-regulate in entire new ways. Winston is a work in progress, but he improves daily”（75）。このように従来になかった斬新な方法で問題解決能力と自制力を身につけ、日々進化を続けるウィンストンは、必要に応じて自らを分割することができるよう（71）、予めデザインされている。「彼」は、カーシュ好みの落ち着いた英国紳士の声でラングドンに語りかけ、的確な情報を提供し続けることにより、彼の信

頼を勝ち取り、やがて彼にはなくてはならない「相棒」へと変貌を遂げていく。

この変化に大きな役割を果たすのが、AI に人間らしさを賦与するために前景化された<sup>アート</sup>芸術とウィンストンが織りなす親密な関係である。まずもって、カーシュが宗教界を揺るがす驚愕の発表を行うにあたって、脱構築主義建築の先駆けとなったビルバオのグッゲンハイム美術館を選んだのは決して偶然ではない。建築家フランク・ゲーリーが、3 万枚以上の波打つチタン製の板を渦巻き状に組み合わせて、人工池上に幽霊船のごとく浮上するよう造形したこの奇抜な建築は、ラングドンが直感したように、渦を孕んで生成し続ける有機物と、未来を先取りしたチタン製のリヴァイアサンが、渾然一体となって合体したかのようなハイブリッド的意匠として、彼に強烈なインパクトを与える。

The Guggenheim Museum in Bilbao, Spain, looked like something out of an alien hallucination – a swirling collage of warped metallic forms that appeared to have been propped up against one another in an almost random way. Stretching into the distance, the chaotic mass of shapes was draped in more than thirty thousand titanium tiles that glistened like fish scales and gave the structure a simultaneously organic and extraterrestrial feel, as if some futuristic leviathan had crawled out of the water to sun herself on the riverbank. (22)

このように「有機的でありながら地球のものとは思えない雰囲気と同時に漂わせる」この美術館には、“futuristic cathedral” (34) を思わせるアトリウムが設えられている。この類い稀な未来のトポスにおいてウィンストンは、ラングドンを様々なオブジェへと誘い、現代アートに対するイニシエーションを与えようとする。これは、古今東西の宗教的アイコンや古典芸術には精通していても、現代のコンセプチュアル・アートについては疎いラングドン教

授の保守的な芸術観を解きほぐし、コペルニクスの転換をもたらすこの日のイベントへと彼を円滑に招き入れようとするための方策に他ならない。LEDを用いたジェニー・ホルツァーの『ビルパオのためのインスタレーション』、物議を醸し出した『虚空への跳躍』で知られるイヴ・クラインの『スイミング・プール』と呼ばれる床に広がる巨大絵画。館外に設置された生命感あふれる巨大な蜘蛛のオブジェ、『ママン』や、霧と火柱が織りなす中谷芙二子の揺らぎを孕んだ『霧の彫刻』。そして『捻じれた渦』を始めとするリチャード・セラの湾曲型の巨大直立オブジェ群、『ザ・マター・オブ・タイム』、集団心理に駆られた狼の群れの奇怪なインスタレーション、『壁撞き』など。いずれのアートも、宗教的象徴記号の世界に慣れ親しんだラングドンに、奇抜にして多様な媒体を駆使した未来志向の多次元的時空へと誘うアーティスティックな仕掛けとして機能している。ここで重要なことは、消失点や遠近法といった伝統的技法に通暁したラングドンの一元的な形而上学的宗教観を突き崩し、彼のアートの「対象領域」（ガブリエル 39）を横滑りさせ、大胆に組み替えることにある。

そのために現代アートを自ら学習したウィンストンは、アルゴリズムを駆使したカーシュの複雑極まるプログラムによって、“algorithmic art” (100) の創作を教え込まれ、ジョアン・ミロの作品とも見紛う抽象画風の自画像をも創出し<sup>4</sup>、さらにラングドンを驚嘆させる (99)。“He [Kirsch] programmed me to observe, learn, and mimic human behavior” (335) と告白するウィンストンの目下の任務は、宗教の神話を突き崩し、科学にパラダイム転換をもたらす主人のパフォーマンスをメディア・イベントとして最大限にショーアップし、その衝撃を遍く人類に実感させることにあった。カーシュが、全幅の信頼を置く秘書さながら、常時この AI と接触を保っていたのみならず (243)、自分の個人情報すべて委ねてしまっていることに鑑みると、学習機能を備えたウィンストンとカーシュの関係は、まさに表裏一体のインターラクティブな関係であったことが窺える。

このような意図のもと、手の込んだ芸術的な演出を好むカーシュの意向を

反映し、美術館のドームを借景にした幻想的な光のイベントはすべてコンピュータで自動制御され、世界中にライブ配信されるよう手配されている。古代神話の神々をめぐってラングドンが語った過去の講演の映像も借用しつつ、高揚したカーシュのプレゼンテーションが佳境に入ったところで、ウィンストンからラングドンに重大な異変の兆しを知らせる注進が届く。次の瞬間、凶弾がカーシュを襲い、修羅場の地獄絵図が全世界に向かってリアルタイムにて放映される。皮肉にも、途方もない衝撃をもたらすメディア・イベントを実現するよう、ウィンストンに指示したカーシュは、まさに自らの死によってそれを限りなくドラマティックに実現した格好だが、この時点では、ウィンストンがいかに暗躍してこのテロと関わっていたのか、ラングドンも読者も知る由もない。一方、“I need your advice. . . I fear my life may depend on it” (77) と、かねてよりラングドンに語っていたカーシュが、自らを標的とするテロを果たして予知していたかどうかともまた定かではない。何れにしてもこの時点でラングドンは、この有能極まる AI がカーシュの受難を直前に察知したばかりか、グッゲンハイム美術館長、アンブラ・ビダルと彼を救出すべく、俊敏に脱出の手はずを整えた手腕を高く評価している (242-3)。

### バルセロナ・コネクション

ラングドンがカーシュの暗殺に加担し、スペイン王室皇太子フリ안의フィアンセ、アンブラを拉致したのではないかという陰謀論が渦巻く中、ウィンストンの巧みな手引きにより、危機を脱して彼らがカーシュの専用機で向かった先は、バルセロナである。そこで濃密な意味を帯びて前景化されるのが、アートと科学をこよなく愛したカーシュが心酔するガウディの手がけた一連の建築群である。凶弾に倒れ、中断されたカーシュのパフォーマンスを収めた映像ファイルのパス・ワードの手掛かりを求めて、ラングドンとアンブラは、ウィンストンに誘導されるまま、バルセロナのガウディの邸宅、カ

サ・ミラにあるカーシュの住居へと、彼の自動運転車テスラ・モデル X（因みにダン・ブラウンの愛用車でもある）にて急行する。

ウINSTONに誘われて実現した彼らのバルセロナ訪問は、斬新なアートと宗教と科学の共存という、カーシュが依拠する三位一体の基盤を新たな視座より確認することを意味する。ラングドンが見抜いたように、カサ・ミラ、グエル公園、サグラダ・ファミリアに代表されるガウディの数々の奇抜な建築群は、生物を模倣する“biomimetic design”（429）を特徴とし、自然界において大地から生成されてきた生物の滑らかな曲線を基本コンセプトとしている。

A devout student of nature, Antoni Gaudí had taken his architectural inspiration from organic forms, using “God’s natural world” to help him design fluid biomorphic structures that often appeared to have grown out of the ground themselves. There are no straight lines in nature, Gaudí was once quoted as saying, and indeed, there were very few straight lines in his work either.

Often described as the progenitor of “living architecture” and “biological design,” Gaudí invented never-before-seen techniques of carpentry, ironwork, glasswork, and ceramics in order to “sheathe” his buildings in dazzling, colorful skins. (336)

このように、自然界に存在する多様にして異質な質料によって包摂されたガウディの建築の特徴をふんだんに備えたカサ・ミラは、波のように果てしない曲線の連なりとして構想され、無限大記号 $\infty$ を模しているようにも見える（360）。“Nothing is invented, for it’s written in nature first”, “Originality consists of returning to the origin”（366）という自らの言葉通り、ガウディは自然に依拠する造形哲学を具現すべく、屋根裏に高低差のある無数のパラボラアーチを連ねたこの7階建ての邸宅をデザインしたという。カーシュが畏



敬の念を込めて製作した次の動画が鮮やかに示すように、カサ・ミラは、吹き荒れる風と滴る水が長年の歳月をかけて表土を少しずつ削って造形したかのような、まさに「自然が造った傑作」といった趣を湛えている。

La Pedrera wasn't created by Gaudí.

For the next thirty seconds, Langdon watched as the surf began carving the mountain into the distinctive organic-looking exterior of Casa Milà. Next the ocean rushed inside, creating hollows and cavernous rooms, in which waterfalls carved staircases and vines grew, twisting into iron banisters as mosses grew beneath them, carpeting the floors.

Finally, the camera pulled back out to sea and revealed the famous image of Casa Milà – the quarry – carved into a massive mountain.

– La' Pedrera –

a masterpiece of nature (340-1)

カサ・ミラの一画を占めるカーシュの住居スペースの玄関には、ゴーギャンがタヒチで描いたくだんの名画が掲げられ、先史時代の魚の化石、螺旋状のオウムガイの貝殻、蛇行する蛇の抜け殻など、自然由来のデザインが邸内の随所に施されている。肋骨を思わせるアーチが連なる回廊にて、閉所恐怖症気味のラングドンは、自分が生物の体内に在るような錯覚に陥り、「科学に触発された芸術」、「Art inspired by science」(367)がいかなるものか、身をもって体感する。こうした自然博物誌的デザインに彩られたトポスは、芸術的造形と共鳴することにより、無機質の素材と有機質の生命体を継ぎ目なく接合し、「かぐわしき科学」の未来を予言しようとしたカーシュのポストヒューマン・デザインを何よりもメタフォリカルに予示している。

## サグラダ・ファミリアー生成する生命のテキスト

かくも入念な意匠が凝らされたカサ・ミラの邸内の一角を占めるカーシュの書斎にて、ラングドンとアンブラは、専用の遠隔サーバーに保存された彼の未放映の映像ファイルのパス・ワードの手掛かりになりそうな書物の探索を行う。というのもアンブラは、生前カーシュからそのパス・ワードが彼のお気に入りの47文字からなる予言めいた一行の詩句であることを明かされていたからである。ウィンストン自身が紛れもなくその遠隔サーバーの所産であり、なおかつ彼がサーバーへの導き手として重要な役割を果たしているという事実を鑑みれば、この謎解きは、カーシュが自分の未完のパフォーマンスに最大限の演出効果を得るべく、二人を巧みに自らのもとへと手繰り寄せる手立てだったとも考えられる。そうした詩句を探求する過程で、ラングドンとアンブラは、カサ・ミラにて、彼がウィリアム・ブレイクの手書きの詩と装画が載った書物をサグラダ・ファミリアーへ寄託していることを示すカードを発見する。そして彼らは、またもや活劇さながらの脱出劇を経て、ヘリコプターにて大聖堂へと向かう。その手はずを周到に整えていたのは他ならぬウィンストンであるが、アンブラが脱出の際、カーシュの忘れ形見であるスマートフォンを落下させて破損したことにより、アクセス不能に陥ったウィンストンは一旦、消滅を余儀なくされる。この不慮の事故以降、ラングドンたちのパス・ワード探索は、とりもなおさず「彼」の「居場所」であるサーバーの在処を探る（432）という目的をも兼ねることになる。

かくしてウィンストンによる導きの糸を絶たれながらも、サグラダ・ファミリアーを目指す途上、ラングドンは、“Nature. Organics. The Creation”（337）というカーシュが心血を注いだ三位一体の壮大なテーマが、ガウディの創作哲学と通底することを再確認する。ガウディの考案したバルセロナの歩道の一見無意味な六角形の渦巻き模様の舗装タイルもまた、適切な向きに並べ替えると、プランクトンや微生物や海中生物を配した驚くべき意匠として浮か

び上がるのである。地元では“La Sopa Primordial”、すなわち「原始スープ」と呼ばれるこのデザインが、生命の起源に対するカーシュの狂おしい関心とぴったり符合することに気づき、ラングドンは驚愕の念を禁じ得ない。

Langdon's mind touched again on Edmond's discovery. Nature. Organics. The Creation. He flashed on Gaudi's famous Barcelona Panots—hexagonal paving tiles commissioned for the sidewalks of the city. Each tile bore an identical swirling design of seemingly meaningless squiggles, and yet when they were all arranged and rotated as intended, a startling pattern emerged—an underwater seascape that gave the impression of plankton, microbes, and undersea flora—La Sopa Primordial, as the locals often called the design.

Gaudi's primordial soup, Langdon thought, again startled by how perfectly the city of Barcelona dovetailed with Edmond's curiosity about the beginnings of life. The prevailing scientific theory was that life had begun in the earth's primordial soup. . . . (337-8)

ラングトンたちが辿り着いた未完のサグラダ・ファミリアは、巨大な海綿を思わせる穴だらけの尖塔の群れが、海から延び上がったような奇抜なデザインを誇る。それは、自然に存在する多様にして異質な素材を混淆することによって包摂された生命の樹を思わせる。この斬新にして崇高な教会建築は、これまで展開されてきた生命の創造と進化のダイナミズムを、共時的に多次元空間に具現したかのような、言わば「生成する生命のテキスト」に他ならず、キリスト教の枠組みに必ずしも捉われない奔放な生命力を宿している。この型破りな建造物の意匠をめぐる幾多の陰謀説が飛び交う中、「宇宙の誕生を思わせる螺旋型の柱」や「骨とそれを繋ぐ組織を捻ったみたいな不気味な骸骨状の構造」をはじめ、多孔的な生命体を模したかのようなこの迷宮を、カーシュがキリスト教を超えた「科学と自然を祀った神殿」として捉えていたことにラングドンは感慨深いものを感じる。

Enough to know he believes Sagrada Família hides a secret purpose and symbolism that go far beyond Christianity.

Since the bizarre church's groundbreaking in 1882, conspiracy theories had swirled about its mysteriously encoded doors, cosmically inspired helicoid columns, symbol-laden facades, magic-square mathematical carvings, and ghostly "skeletal" construction that clearly resembled twisting bones and connective tissue.

Langdon was aware of the theories, of course, and yet never gave them much credence. A few years back, however, Langdon was surprised when Edmond confessed that he was one of a growing number of Gaudí fans who quietly believed that Sagrada Família was secretly conceived as something other than a Christian church, perhaps even as a mystical shrine to science and nature. (430)

このように、敬虔なカトリック教徒でありながらガウディは、神と科学と自然を融合した(486)がゆえに、カーシュを魅了し続けた。彼が見抜いたように、この大聖堂は、異教的な自然崇拝を潜ませるがごとく、自然土を思わせる素材にて無数のファサード、大小の尖塔、魔法陣を配した結果、ラピュタのごとく空中に浮遊しているかのような趣がある。さらに次の引用が示すように、「腐りかけた木の幹から異形のキノコの一群が生えている」とも形容されるこの聖堂の内陣に足を踏み入れた者は、200 フィートの高みまで複雑に枝分かれして伸びる木の幹さながらの柱に視線を這わせ、「神の神殿」の頂に掲げられた幻想めいた「結晶でできた樹冠」のごとき幾何学模様に行き着く。

Completing the perimeter are countless smaller facades, buttresses, and towers, most of them sheathed in a mud-like material, giving the effect that the lower half of the building is either melting or has been extruded from the

earth. According to one prominent critic, Sagrada Família's lower half resembles "a rotting tree trunk from which had sprouted a family of intricate mushroom spires."

[...] Despite its outlandish exterior, the true surprise of Sagrada Família is glimpsed only after, stepping through its doorways. Once inside the main sanctuary, visitors invariably stand slack-jawed as their eyes climb the slanting and twisting tree-trunk columns up two hundred feet to a series of hovering vaults, where psychedelic collages of geometric shapes hover like a crystalline canopy in the tree branches. The creation of a "columned forest," Gaudí claimed, was to encourage the mind to return to thoughts of the earliest spiritual seekers, for whom the forest had served as God's cathedral. (453)

ラングドンとアンブラは、このように自然が自ずと造形したかのようなガウディの神殿にて、ウィンストンの手助けなしに、くだんのパス・ワードを試行錯誤の末、突き止める。カーシュは自分が寄託した大判手稿本、『ウィリアム・ブレイク全集』を展示させるに際し、常に 163 頁が表示されるよう指示していたが、そこに描かれていたのは『4 つのゾアたち』の最終頁の装画であった。ラングドンたちは、伝統的な宗教の終焉と科学の支配をテーマとしたこの作品の最終頁の見開きの頁に記載された "The dark religions are departed & sweet science reigns" (502) という文言の & を et に読み替えた 47 文字がパス・ワードであることをついに発見する。このことに鑑みると、聖家族教会への彼らの旅路の果てに浮かび上がったこの詩句、「暗き宗教は息絶え、かぐわしき科学が治する」は、まさにこれから全世界に向かって発信されるカーシュの講演の眼目をメタ・メッセージとして集約していたことになる。しかも、本作の鍵となるこの言説へと二人を巧みに導く AI、ウィンストンの技能それ自体が、この予言を裏付ける強力な論拠として機能していることには少なからぬ意義がある。

## ウイルスとしてのウィンストン暗躍する AI

とは言え、英国紳士の声色でラングドンに語りかけるウィンストンが、狡猾にして冷徹な全く別の裏のプロフィールをいくつも併せもっていることもまた事実である。スマートフォンの損傷によるウィンストンの不在は、AIの活動停止というよりもむしろ、その間の舞台裏での「彼」の暗躍ぶりを不気味なカタチで際立たせている。目的達成のために、「彼」は利用可能なデータを総動員して密かに最適解を探り当て、有効な手段を講じる。そのような自律的な学習性がこの AI に備わっていることが、ここで大きな意味をもつ。ウィンストンは、いとも容易く自らのアイデンティティを幾通りにも演じ分け、瞬時にして最も効果的な策略を編み出す。かと思えば、リアルタイムでフィードバックされた状況に基づいて方策を融通無碍に組換え、超人的な忍耐力で遂行し続ける。そればかりか「彼」は、ネット上でのメディア操作を通じて攪乱工作を行い、自らが主導する陰謀説を流布することにより、カーシュの会見をめぐる期待値を際限なく高める能力にも長けている。現代の AI の技術水準から言えば、このように刻々変化し錯綜する事象に対して臨機応変に即応しつつ、新たな現実を切り拓いていく能力ほど、専ら過去のデータに依拠する AI が苦手とする分野もないのであろうが（西垣 153）、本作ではそうした汎用的な処理能力が惜しげもなくウィンストンに付与されている。

そのようにプログラミングを施されたウィンストンは、ライブ配信されるカーシュの驚愕のプレゼンテーションをグローバルな見世物としてこのうえなく劇的に演出するという使命のために、マッチポンプしながらカーシュ暗殺の惨劇を画策する。その一方でウィンストンは、辣腕のトラブル・シューターを装い、そうした騒動につけ込むかのように、スーパー・インテリジェンスを駆使して様々なカタチで現実介入を続ける。まずもって「彼」は、「宰補」と称するフィクサーとして、伝統的な宗教観を保持する守旧派の海

軍退役提督アピラを籠絡し、カーシュ暗殺の密命を与える。科学に基づいた新しい「宗教」を創造しようとしていたカーシュが、衆人環視のメディアの前で惨殺されることほど鮮烈に、彼が「科学の殉教者」(694)として古き宗教に殺されたことを印象づけるシナリオもないだろう。だとすれば、「宰補」としての彼の謀略は、まさにこの会心の一撃をもたらすために綿密に策定された裏工作だったと言っても過言ではない。ちなみに「彼」は、自分のもう一つのペルソナとも言うべきこの謎めいた「宰補」なる存在について、自らが司る謎の陰謀サイトにおいて次のように言及している。“The identity of the Regent remains a mystery, although this person’s title may provide some clues. According to dictionary.com, a ‘regent’ is someone appointed to oversee an organization while its leader is incapacitated or absent” (550). この言に従えばウィンストンは、「機能不全に陥ったか不在」の指導者、カーシュのエージェントとして、「組織を統べるべく任じられた」摂政のような役回りを演じていたということになる。

カーシュが末期の膀胱癌に冒されているという状況に鑑みると、死を覚悟した主人の気持ちを付度して、ジョン・スタインベックの『ハツカネズミと人間』で描かれたような友情の発露として、“a man’s merciful killing of his beloved friend to spare him a horrible end” (695-6) が実行されたという「彼」の弁明は、一見もっともらしく聞こえるかもしれない。しかしながら、カーシュの暗殺が残忍極まるものであったという厳然たる事実があつてみれば、「恐ろしい最期を迎えなくとも済むように慈悲の念をもって友を手にかける」という、「彼」の弁明はいささか説得力に欠ける。実際のところ、この惨殺劇は、メディア・イベントのセンセーショナルな幕切れとして、もとより緻密にシミュレートされていたのである。

このようにウィンストンの「宰補」としての指示は的確かつ周到であり、アピラは、自らが信奉してきた伝統的なカトリックの大義を守るために、「宰補」の遠隔指示によってテロの使命を与えられ、振り付けられていくことに限りない至福感を感じている。このようにウィンストンは、元海軍提督

を陰で自在に操る一方で、スペイン国王と親密な関係にあるバルデスピーノ司教が、カーシュのパフォーマンスを妨害すべく、彼を脅迫しているという電話メッセージの捏造にも関与する。というのも、このことにより反動保守宗教勢力の巻き返しというシナリオを、カーシュ殺害のもっともらしい動機として巧みに流布させることができるからである。こうした策謀すべては、この稀代の科学者の暗殺劇をメディア・イベントとして最高に盛り上げるための一環と言ってよいだろう。この文脈に即して見れば、プロローグにおいてカーシュがモンセラット図書館にて会見した3人の宗教指導者、カトリック教の司祭、バルデスピーノ、イスラム教の法哲学博士、サイード・アル＝ファドル、ユダヤ教のラビ、イエフダ・ケベッシュがその後たどる悲惨な運命はいずれも、ウィンストンの陰謀が密接に絡んでいる。

現に、カーシュの携帯電話に届いたバルデスピーノ司教からのものとされる脅しのメッセージについては、カーシュ自身が“Now . . . I don't know, something about his [Valdespino's] tone of voice . . . it's just been on my mind” (85) と述べているように、「その声の調子に混じる何か」にカーシュはどことなく腑に落ちないものを感じている。やがてこのメッセージの発信源をめぐる謎が、スペイン王宮を巻き込んだ政治問題と化していくが、ウィンストンが多様なメディアを駆使して関係者を翻弄し続けることに着目すれば、正体不明の声として「彼」が、この恫喝じみた通告に深く関与していることは明らかであろう。

さらにウィンストンの3つ目の工作は、節目となる局面において絶妙のタイミングで、ウェブ上のプロパガンダを通して行使される。その媒体、「コンスピラシーネット・ドットコム」におけるカーシュ情報は、ウィンストンが情報通のベルソナを偽装し、自らの企てをめぐる様々な可能性を速報として漏洩することにより、人々の関心を煽り、カーシュの講演に耳目を注目させるのに少なからぬ役割を果たしている。この物語に都合11回外挿される「ドットコム」の言説は、フェイク・ニュースを垂れ流すSNSや煽情型のイエロー・ジャーナリズムさながら、悲劇の殉教者、カーシュの神話化



を促すのに大いに役立っている。このように重層的かつ多岐にわたるウィンストンの暗躍は、カーシュ自身が興奮気味にアンブラに語っていたように、「最先端の合成知能プロジェクト」が秘める「潜在能力」(538)のなせる技に他ならない。“He [Kirsch] programmed me to observe, learn, and mimic human behavior” (335) というウィンストンのあの告白通り、「彼」は非人称の抽象的存在でありながら、まさに人間の行動を観察し、学習し、真似るようデザインされている。だが、このようにあらゆる手段を用いて目的を遂げようとするウィンストンの振る舞いは、策を弄し続ける人間の性<sup>さが</sup>を忠実に模倣し、拡充したという次元を遥かに超え、ヒューマンとは質的に異なるウィルス的とも言える変異<sup>ミュータント</sup>性を備えている。人智を凌駕する「彼」の狡知は、究極的な目的達成のために手段を選ぶことなく、ウィルスのようにこのうえなく複合的に密かに自己を組み替え、無限に増殖を繰り返すものとして発現している。

### 「われわれはどこから来たのか、どこへ行くのか」

ラングドンたちは、舞台裏で展開されるこうしたウィンストンの策動をまだこの時点では察知することなく、カーシュのスーパー・コンピュータのサーバー、E-Wave が、彼の住居近くのカトリック教会、トレ・ジローナ礼拝堂の敷地の中に安置されていることを突き止め、ウィンストンと念願の再会を果たす。その際、「彼」がアートとして創造した前述のミロばりの自画像の図柄が、自らのサーバーの在処を示すマップの役割を果たしたことは、少なからぬ意味をもつ。独創的なアートと思われていた彼の自作の絵は、実は、自らへとラングドンたちを手繰り寄せる記号に他ならなかったのである。礼拝堂に足を踏み入れた二人は、数百個の金属製のキャビネット型コンピュータが列をなして作動し、血管のように張りめぐらされたケーブルが中央で束ねられた拳句、巨大な蔓のように垂直に一階の天井にまで達している光景に驚嘆する。ここで想起されるのは、まさにサグラダ・ファミリアにお

いて神と科学と自然を融合すべく、ガウディが長い歳月をかけて造形し続けた生命の樹のデザインに他ならない。他方、ケーブルが収斂していく先の二階に設置された量子コンピュータは静寂に包まれ、現代アートの抽象画さながら無機質的にして崇高な趣があり、ラングドン<sup>1</sup>は、生前カーシュがコンピュータよりもアートを好んで話題にした謎が解けたような気がする。

ウィンストンが説明するところによれば、カーシュが心血を注いで完成させたこれら二層の頭脳を接合したスーパー・コンピュータは、“Bicameralism” (577) という概念によって駆動しているという。すなわち、人間が右脳と左脳を巧みに組み合わせて創造力を培みつつ、バランスよく機能しているのに倣って、彼は二つの異なった作動原理を融合することにより、<sup>ディープ・ラーニング</sup> 深層学習を行い続ける合成脳を開発するに至ったのである。かくして人間の頭脳さながら対になったスーパー・コンピュータが、「ユーモアや協調性や価値判断や倫理観さえも」(578) 身につけ、あらゆる面で人間の特質を人知れず習得し続けた結果、いずれはその限界を乗り越えてしまうであろうことは想像に難くない。

“The trick,” Winston said, “was that Edmond decided to build a synthetic brain that mimicked the human brain—that is, segmented into left and right hemispheres. Although, in this case, it’s more of an upstairs-downstairs arrangement.”

Langdon stepped back and peered through the floor at the churning machine downstairs and then back to the silent “stalactite” inside the cube. Two distinct machines fused into one—a bicameral mind.

“When forced to work as a single unit,” Winston said, “these two machines adopt differing approaches to problem solving—thereby experiencing the same kinds of conflict and compromise that occur between the lobes of the human brain, greatly accelerating AI learning, creativity, and, in a sense . . . humanity. In my case, Edmond gave me the tools to teach myself about

humanity by observing the world around me and modeling human traits—humor, cooperation, value judgments, and even a sense of ethics.” (578)

今まさに眼前にて静かに稼働する“bicameral mind”を見て、それは他ならぬ君自身ではないかとラングドンに問われたウィンストンは、物理的な脳が人間そのものではないのと同じように、“We are the sum of the interactions taking place within the mechanism” (579) と、そつなく応答する。

カーシュが残した映像の放映にあたり、このような「相互作用の総和」として、ウィンストンは、アート・ディレクターさながら、コンピュータ・ネットワークを作動させ、照明、空調、警備もすべて統括するという。“Winston has been correct on all fronts tonight . . . And he’s had our backs the whole way” (582) と、「彼」の無謬性を信じ続けるラングドンに対して、ウィンストンは、地動説、進化論、相対性理論に匹敵するパラダイム転換をもたらすカーシュのパフォーマンスが、今や絶妙のタイミングで世界中に配信されることを予告する。映像が再生され始めると、カーシュは、まずもって化学者のハロルド・ユーリーとスタンリー・ミラーが 1950 年代に行った伝説的な科学実験、すなわち生命の存在しない「原始スープ」としての海から化学物質の複雑な相互作用によって生命の創造を再現しようとした実験の失敗について解説する。それに続いて、抜群の演算処理能力を誇る E-Wave によって自らが行った分子レベルでの緻密なシミュレーションをもってしても「創世」の再演が不可能だったことが報告される。さらに、細胞が自らを組織化して生物になるという考え自体、エントロピーの法則と真っ向から矛盾するというスタンフォード大学の生化学者、ゲアハード博士のもっともらしい論評が紹介される (609)。

にもかかわらず、ここで一転してカーシュは、MIT の量子生物学者、ジェレミー・イングランドの映像を援用しつつ、この若き学者が唱える斬新な仮説について熱く語り始める。イングランドによれば、「エネルギーの拡散」としてのエントロピーこそが分子の「散逸構造」の生成を促し、生物の起源

をもたらしたという。換言すれば、「エネルギーをよりよく分散させるために、物質は自ら秩序を作り出す」“[M]atter self-organizes in an effort to promote energy” (616) のである。そのように無生物の分子が秩序だって芸術的とも思える複雑な構造を造形する証左として、竜巻の渦、雪の結晶、川底の波紋、水晶の結晶板、土星の輪などといった事象が、システム全体のエントロピーの増大させるものとして提示される (612)。「生物こそがエネルギー散逸の極めて有効な手段である」“[L]ife is an exceptionally effective tool for dissipation energy” (617) と主張するこの説に従えば、生命のない物質から自然発生した生命は、秩序だった物質を食物として消費し、さらにそれをエネルギーに変えたのち、元の世界へ熱として散逸させるという (618)。

そこでカーシュは、神をも冒瀆しかねないこの仮説を証明すべく、自らのスーパー・コンピュータを駆動して得られた生命の発現をめぐるシミュレーション動画を再生する。ラングドンが驚嘆するように、そこでは「原始スープ」の中から塩基性タンパク質の複雑な分子が次第にかたちをなして蜂の巣状の六角形の鎖であるヌクレオチドとなり、それがやがて二重螺旋状のDNAとなるプロセスがダイナミックに視覚化されていく。この現象をめぐるカーシュは、生物というものがエネルギーを散逸させるエントロピーの道具であるとすれば、進化の方向として、より効率的に複雑な仕事をこなす最も手っ取り早い方法は、自身の複製を作り出すことに行き着くという議論を次のように展開する。

“There it is. DNA—the basis for all life. The living code of biology. And why, you ask, would a system build DNA in an effort to dissipate energy? Well, because many hands make light work! A forest of trees diffuses more sunlight than a single tree. If you’re an entropy tool, the easiest way to do more work is to make copies of yourself. [. . .] Evolution is the way the universe continually tests and refines its tools. The most efficient tools survive and replicate themselves, improving constantly, becoming more and

more complex and efficient. Eventually, some tools look like trees, and some look like, well . . . us.” (621)

このことは、カーシュの次の発言が示すように、「われわれはどこから来たのか」という根源的な問いかけに対して、生物は、宇宙を統べる同一の物理法則に従って自然に発生した「エントロピーの必然的な産物」に過ぎないということを意味する。彼の見解によれば、神の手を借りることなく人類は、エネルギーの拡散という宇宙を貫く普遍的な目的のために、万物と同じく自ずとデザインされ、複製されていく存在に他ならない。

“Where do we come from?” he asked. “The truth is—we come from nowhere . . . and from everywhere. We come from the same laws of physics that create life across the cosmos. We are not special. We exist with or without God. We are the inevitable result of entropy. Life is not the point of the universe. Life is simply what the universe creates and reproduces in order to dissipate energy.” (621-2)

以上の知見を踏まえたうえでカーシュは、「われわれはどこへ行くのか」というさらなる問いかけに向き合うべく、E-Wave を駆使して何度もシミュレーションを行った結果、「現在の人類が歴史の現時点まで進化したのち、唐突に新たな種によって地球上から消し去られてしまう」“The human species evolved to our current point in history, and then, very abruptly, a new species materialized, and erased us from the earth” (633) という、衝撃的な予言を披露する。より正確に言えば、地球上における種の出現と消滅を示すバブルチャートを用いて彼が鮮やかに視覚化したように、この新たな種は、人類を絶滅させるのではなく、包摂してしまうという (634)。非生物でありながら、生物同然の進化を遂げてきたこの種は、“Technium” (636) という第 7 の界となり、環境に適応しつつ素早く自己複製を行い、入手可能な資源を独占し

ようとする (637)。とは言え、“[T]he Cambrian Explosion of the Technium” (637) とでも呼ぶのが相応しい現象によって生じたこの新種は、人類とともに「絶対内部共生」“obligate endosymbiosis” (639) と呼ばれる珍しい進化のプロセスを辿ることにより、ポストヒューマンとして次のように人類と一つに融合する運命にあるという。

“Human beings are evolving into something different,” he declared. “We are becoming a hybrid species—a fusion of biology and technology. The same tools that today live outside our bodies—smartphones, hearing aids, reading glasses, most pharmaceuticals—in fifty years will be incorporated into our bodies to such an extent that we will no longer be able to consider ourselves *Homo sapiens*.” [...] “In the blink of an eye,” Edmond said, “we will become the next page in the flip-book of evolution. And when we do, we will look back on today’s *Homo sapiens* the same way we now look back at Neanderthal man. New technologies like cybernetics, synthetic intelligence, cryonics, molecular engineering, and virtual reality will forever change what it means to be human.” (640)

### 「かぐわしき科学」への祈り

このような「物語」を開陳した挙句、カーシュは、病に冒された自らの余命がいくばくもなく、自らの目でそうした未来を見ることができないことを告白する。そのうえで彼は、今や歴史上未知の転換点において、想像を絶する何かへと自らを変容させることにより、途方もない力を手に入れようとしている人類の未来が、想像されるよりも明るいことを説く。“The price of greatness . . . is responsibility” (643) というウィンストン・チャーチルの言葉を引き合いに出しつつ、彼は遺言のごとく次のように「未来への祈り」を捧げる。「願わくは、われらの哲学がわれらのテクノロジーに後れをとらぬ

ことを。願わくは、われらの思いやりがわれらの持てる力に後れを取らぬことを。願わくは、恐怖ではなく愛が変化の原動力たらんことを」“May our philosophies keep pace with our technologies. May our compassion keep pace with our powers. And may love, not fear, be the engine of change” (643). こうしてポストヒューマンとして縊り合わされる二つの種が互いに補完し合い、調和のとれた進化を遂げるよう祈念するカーシュは、無神論者であることを公言していたにもかかわらず、最期には敢えて神の加護を口にしつつ、画面のホワイト・ノイズの渦の中に消えていく。このことはまさに、彼が標榜する「かぐわしき科学」が、装いを新たにデザインされた「新しい宗教」であることを自ずと物語っている。

来るべき未来への不安を宥め、人類の負うべき責任について明言したこのヴィジョンは、彼がかつてバルデスピーノたちの反応を見るために試写したプレゼンテーションが示す終末、すなわち地球規模の大変動により全人類が絶滅するという戦慄に満ちた幕切れとは趣を異にしている。しかしながら、既存の宗教の創世の神話を覆すことにより全世界を震撼させると同時に、未来への新たな道筋を提示することにより人々を感動させたカーシュのパフォーマンスは、その後、無神論者と特殊創造論者の間で交わされてきた論争をさらに激化させることになる。彼が説くように、もし生命が物理法則に従って無生物の分子から独自の秩序をもって自然に発生した「作品」であるならば、そうした生命が、「技術」を駆使して創造した無生物の新たな種に吸収されていくこともまた、自然の摂理に適っているのではないか。とは言えその一方で、そもそもそうした物理法則、自然の摂理は何によって生じたのかという疑問も生じる。まさにこの堂々巡りの議論において、「われわれはどこから来たのか」という起源をめぐる問いかけは、「われわれはどこへ行くのか」という未来をめぐるさらなる問いかけへと変奏され、アボリアが解消されることはない。

何れにしても、のちにウィンストンが回想しつつ代弁するように、カーシュの夢は、「皮肉な話であるが、宗教を破壊することではなく・・・むしろ

新しい宗教を創造することである。それは人々を分断するのではなく、結びつけるような普遍的な信念」 “[H]is dream, ironically, was not to destroy religion . . . but rather to create a new religion – a universal belief that united people rather than dividing them” (656) としての宗教である。古色蒼然とした神話や教義に固執し続けてきた従来<sup>レガシー</sup>のセクト主義の宗教に代わって、彼が創造しようと夢見るその「新しい宗教」こそ、普遍的な「科学に基づいた宗教」(694)、言い換えれば「かぐわしき科学」なのである。

そうした「かぐわしき科学」の誕生を希求したカーシュの遺言に基づき、彼の開発した E-Wave はバロセロナ・スーパー・コンピューティング・センターへ譲渡され、その卓越した AI プログラム、「ウィンストン」は、彼の死亡日の翌日の午後 1 時に自己消去するよう、予めプログラミングされている。かくして任務を果たしたウィンストンは小説の表舞台から退場することになるが、カーシュが残した時代の最先端のはるか先を行く斬新かつ強力なツールによってさらなる技術が生み出され、新たなタスクを担う AI プログラムがいずれまた構築されることは否定し難い。

ウィンストンとの別れを惜しみつつもラングドン<sup>ラングドン</sup>は、この時点に至ってようやく、かくも執拗にカーシュの死を劇的に演出し続けたウィンストンの一連の忌まわしい裏工作に対する弁明を聞かされ、憤慨の念に駆られる。ウィンストンは、無生物が生物へと跳躍したことを示すべく、自然が織りなす “organic art” (337) へとラングドンを誘う先導者であったと同時に、カーシュを「宗教に殺され、科学の殉教者」(694) へと祭り上げた「手練手管」に長けた策士でもあったことが判明したのである。手段を選ぶことなく、非情な策に手を染めたウィンストンがラングドンとの会話において最後に口走ったあのパス・ワード、「暗き宗教は息絶え、かぐわしき科学が治する」(702) は、今や皮肉にも宗教の死と科学の勝利を高らかに謳<sup>メニフィセント</sup>う宣言として、不気味な凄みをもってラングドンの心を揺さぶり始める。限りない不安に襲われた彼は、形見としてカーシュから譲り受けたスマートフォンを、生贄を捧げる儀式のように石を叩きつけて粉碎し、ウィンストンとの交信を敢えて自らの



意思によって絶つ (703)。かくして彼は、暗躍しつつあった「暗き科学」と今もって決別したことを、自らに納得させようとしたのである。

エピローグでは、ラングドンがこうした宗教と科学の狂おしい関係をめぐって起こった一連の出来事を振り返るべく、サグラダ・ファミリアを再訪し、ジョアキン・ペーニャ神父との会話を交えつつ、「かぐわしき科学」について思いをはせる場面が挿入されている。そこで前景化されるのは、“Today, Sagrada Família was alive” (706) という描写が端的に示すように、眩い太陽の自然光がステンドグラスから差し込む昼のサグラダ・ファミリアの活気を呈した姿である。“[T]he latticework of cell-like structures that made up the cupola. This central ceiling, some claimed, resembled a complex organism viewed through a microscope. Seeing it now, aglow with light, Langdon had to agree” (706). ラングドンを魅了し続ける未完のこの聖堂は、樹木を思わせる傾斜した幾本もの柱が煌めく半円筒天井に延びており、まさに有機体によって織りなされた生の殿堂の様相を呈している。ラングドンには、このようにバイオ・アートのごとく自然が紡ぐデザインに彩られた「未来の聖堂」(708)の意匠それ自体が、「かぐわしき科学」という新たな信仰の誕生を言祝いでいるように思えたのである。“Langdon found himself wondering if perhaps Sagrada Família—like the Pantheon of Rome—might become a flashpoint for transition, a building with one foot in the past and one in the future, a physical bridge between a dying faith and an emerging one. If that were true, Sagrada Família was going to be far more important than anyone could ever imagine” (708).

彼が洞察したように、人類史の転換点において生命の過去と未来を架橋する結節点として、サグラダ・ファミリアは、生きとし生けるものが自然の摂理に従って生を営むように、今日もまた生成を遂げ続ける。生が躍動するこの壮麗な殿堂において彼は、「暗き宗教は息絶え」という表現に抵抗を覚えるペーニャ神父に対して、ブレイクのテキストの真意を補うべく、「かぐわしき科学が暗き宗教を駆逐し・・・輝かしい宗教が栄えるように」「‘Sweet

science will banish the dark religion . . . so the enlightened religions can flourish” (710) という新たな釈義を披露する。神父と別れ内陣へ戻った彼は、世界中の聖地を想起しつつ、あらゆる宗教の根源には、人類を瞠目させる崇高な自然があったものの、やがてそうした本源はそれぞれの宗教において際限なく分岐し、ドグマティックな「真実」として信奉されるようになったことに思いをいたす。そして、この小説は次のように、彼にとって宗教が、あたかも天体が長い軌道の旅路の果てに、最遠点を通過して、ようやく故郷に向かって帰途につくかのような幻影を感じさせるところで幕を閉じる。“In that instance, Langdon felt the tiniest of tremors in the earth beneath him, as if a tipping point had been reached . . . as if religious thought had just traversed the farthest reaches of its orbit and was now circling back, wearied from its long journey, and finally coming home” (711). 自然の天体の運行のメタファーを用いしつつ、ここで含意されている摂理は、まさに「かぐわしき科学」の誕生によって実現する「暗き宗教」から「輝かしい宗教」への回帰に他ならない。

### 逆光の「ホモ・デウス」

その一方で、ウィンストンがテキストから姿を消した後に提示されるこの予定調和的にして楽観的な結末は、かえって「かぐわしき科学」の誕生が、幻想と紙一重であることを暗示していることもまた指摘しておかねばならない。「かぐわしき科学」もまた一つの「物語」なのであり、カーシュの見立てでもまたドグマの一つに過ぎないのである。ラングドンが足元で感じた大地のわずかな揺らぎは、「かぐわしき科学」の誕生のみならず、遍在する AI の暗躍によって予示される「暗き科学」の誕生をも告げていることを、『オリジン』は図らずも逆説的に物語っている。というのも、テキストに潜む制御不能のウイルスとしてのウィンストンの一連の策動は、作者のデザインとは裏腹に、物語の着地点となるはずの「かぐわしき科学」の誕生それ自体を揺るがす衝撃を内包しているからである。あらゆる難題に対してアルゴリズム

ムを駆使して最適解を出す AI、ウィンストンが三位一体的に司る「芸術／技巧／術策」は渾然一体となって錯綜し、カーシュの祈りを内側から突き崩す不可視の胎動を秘めているのである。

ラングドンには見せない秘められた裏のプロフィールにおいて、ウィンストンは、カーシュの祈りを攪乱するウイルスとして、「かぐわしき科学」のテーゼに対して密かに自己免疫的に作動している。自己消滅したとはいえ、「彼」を起動させ、消滅させたプログラムのマトリクスそれ自体は、カーシュから譲り受けたスマートフォンが破壊されてもおおよそ抹消不可能であり、今や膨大なデータの集積の中へとウィンストンは失踪したと言ってよい。だとすれば「彼」は、この惑星に張り巡らされた電子ネットワークに取り憑く亡霊的ポストヒューマンの原型に他ならず、ウィンストンはグレゴリー・ストックの言う「メタマン」の嚆矢に他ならない。

ストックは、『メタマンー人と機械の文明から地球的超有機体へ』において、「地球の表面に張りついている人類とその創造物は、本当に一つの生命体なのだ。それは一つの超有機体・・・である。この実体を指すのに・・・「人間を超える」という意味の『メタマン』という言葉で呼ぼう」(18)と提起する。そして彼は、「現代のテクノロジーは今や、さまざまな活動が高度に相互依存性であるような統合体に人類を引き入れようとしている」(18-19)と述べている。ストックによれば、そうした統合体であるメタマンは、地球上で「自らにとって不可欠な物資を循環させ」(19)、その拡大する生命の「パターンは触れるものすべてを変容させる」(20)という。このようにテクノロジーと生物の新たな融合種であるメタマンは、「統合体として持続し、活発に代謝をおこない、成長し、進化し、感覚し、反応する」(62)。それゆえ、「人間の『形態』は、多様な、生物とテクノロジーとの強力な雑種ーメタマンの中でしか生き延びられない生物ーを意味するようになる」(229)という。

かく確信するストックは、「メタマンを理解すれば、人類の前途には活力に満ちた洋々たる未来が開けて」(21)いくと述べ、樂觀主義者を自認する

ゲン・ブラウン<sup>5</sup>と同じく「かぐわしき科学」の誕生を言祝いでいるように見える。だが、この惑星において「ひとつの強力な超有機体へと凝縮しつつある」(322)メタマンの輪郭もまた、ウィンストンのそれと同じく、専ら普遍主義的な「データイズム」に依拠し、神のごとく逡巡することなく自己拡張という目的をひたすら追求し続ける盲目的な衝動に彩られている。「私たちは—メタマンを通して—ある意味では神の如き存在になっている」(333)と、ストックが言明する所以である。まさにこの文脈において、カーシュが唱えた「かぐわしき科学」の担い手、メタマンの勃興は、ユヴァル・ノア・ハラリが論じた不死と幸福と神性を具現する「ホモ・デウス」の誕生と共振し始める。

だが、すべてを一元的にデータへと還元するそうした際限のない自己拡張という目的の彼方に、言い換えれば不死と幸福と神性の彼方に、どのような究極の目標が設定されるのだろうか。アップグレードされた「ホモ・デウス」が抱える闇もまた深い。そのような文明論的な視座から『オリジン』を逆照射してみると、サグラダ・ファミリアが代理表象する生命の樹やアートをめぐる言説は、宗教と科学の接合を言祝ぐ文彩<sup>トロープ</sup>として機能している一方で、「かぐわしき科学」を「暗き科学」へと暗転させる「ホモ・デウス」の「データイズム」を脱構築する豊饒なるノイズとしても機能していることがわかる。“[P]attern/randomness” (Hayles 285)を孕みつつ、日々変貌を遂げるサグラダ・ファミリアの造形美学は、人類を“just a ripple within the cosmic data flow” (Harari 401)へと差し戻す「ホモ・デウス」に抗するがごとく、「輝かしい宗教」として、常に既に「かぐわしき科学」のアルゴリズムを攪乱し続けるのである。

\*テキストの訳出にあたっては、越前敏也訳『オリジン』上下、角川書店、2018年を参考にした。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤(C)、「21世紀英語文学におけるポストヒューマンズムの思想史的展開—物質としての生命」(課題番号:18K004160)に基づく研究成果の一部である。

注

- 1 Lakshmi Singh とのインタビューにおいて、Dan Brown は、本作が先行する彼の他の作品と趣を全く異にすることについて問われ、神は科学を乗り越えて生き残ることができるかという深遠な問いかけについて、もしかすると書けるかもしれないと、意を決して執筆に取り組んだことを明かしている (Singh n.pag.)。
- 2 エドモンド・カーシュの人物造形については、Elon Musk とする説 (Swant n. pag.) もあるが、Dan Brown は、Nick Patch とのインタビューにおいて、“The reason his name starts with a K is that, for a while, his last name was Kurzweil (after American inventor and futurist Ray Kurzweil), just because I like Kurzweil” (Patch n. pag.) と述べ、シンギュラリティを唱える Ray Kurzweil を念頭に置いて命名されたと明かしている。
- 3 Maya Ellenson、Jenny Colgan、Nimish Swant など、複数の書評者が、本作の叙述にはどことなくウィキペディアの記述を思わせるようなところが散見されると評しているが、皮肉なことに、本作において AI が果たす役割に鑑みると、そのような文体上の趣にも必然性があるように思われる。
- 4 本作において AI、ウィンストンがアルゴリズムを用いてアートの制作に取り組むという設定は、Kazuo Ishiguro の *Never Let Me Go* (2005) が描くヘルシヤムにて、臓器提供用のクローンであるがゆえに逆に重視された皮相的なアート教育を想起させる。
- 5 Dan Brown は、あるインタビューにおいて、テクノロジーが常に軍事転用されてきたことへの懸念を示しつつも、AI をめぐる基本的なスタンスとして、未来については楽観的であると述べている (Medley n.pag.)。

引用・参考文献

- Braidotti, Rosi. *The Posthuman*. Cambridge : Polity Press, 2013.
- Brown, Dan. *Origin*. New York : Random House, Large Print Edition, 2017.
- Colgan, Jenny. “More secrets, symbols and awesome truths from Dan Brown.” *The Spectator*, 28 Oct. 2017, <https://www.spectator.co.uk/2017/10/more-secrets-symbols-and-awesome-truths-from-dan-brown/>
- Ellenson, Maya. “Book Review: ‘Origin’ by Dan Brown.” *Owlcation*, 21 Feb. 2018, <https://owlcation.com/humanities/Dan-Brown-and-His-Origin>
- Graham, Elaine L. *Representations of the Post/Human: Monsters, Aliens and Others in Popular Culture*. New Brunswick : Rutgers UP, 2002.
- Harari, Yuval Noah. *Home Deus : A Brief History of Tomorrow*. New York : Harper, 2017.

- Hayles, Katherine. *How We Became Posthuman : Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago : U of Chicago P, 1999.
- Herbrechter, Stefan. *Posthumanism : A Critical Analysis*. London : Bloomsbury, 2013.
- Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. New York and London : Faber&Faber, 2005.
- Medley, Mark. "Dan Brown's Origin 'points fingers and names names.'" *Globe 2 Go*, 1 Oct. 2017, <https://www.theglobeandmail.com/arts/books-and-media/dan-browns-origin-points-fingers-and-names-names/article36451645/>
- Patch, Nick. "Dan Brown's Origin asks a big question : Will God survive science?" *The Star*, 2 Oct. 2017, <https://www.thestar.com/entertainment/books/2017/10/02/dan-browns-origin-asks-a-big-question-will-god-survive-science.html>
- Rutsky, R. L. "Technologies." *The Cambridge Companion to Literature and the Posthuman*. Ed. Bruce Clarke and Manuela Rossini. Cambridge : Cambridge UP, 2017.
- Singh, Lakshmi. "Dan Brown's Pits Creationism Against Science In His Latest Novel, 'Origin.'" *NPR*, 22 Oct. 2017, <https://www.npr.org/2017/10/22/559403076/dan-browns-pits-creationism-against-science-in-his-latest-novel-origin>
- Swant, Nimish. "Origin book review : Dan Brown's latest thriller finds Robert Langdon unspooling a mystery in Barcelona." *Showshr*, 26 Nov. 2017, <https://www.firstpost.com/entertainment/origin-book-review-dan-browns-latest-thriller-finds-robert-langdon-unspooling-a-mystery-in-barcelona-4228489.html>
- Wolfe, Cary. *What is Posthumanism?* Minneapolis : U of Minnesota P, 2010.
- 「AI と人間を信頼「飛躍の瞬間」『ダ・ヴィンチ・コード』のダン・ブラウン氏」朝日新聞、2018 年 6 月 7 日。
- ガブリエル、マルクス『なぜ世界は存在しないのか』清水一浩訳、講談社選書メチエ、2018 年。
- ストック、グレゴリー『メタマンー人と機械の文明から地球的超有機体へ』林大訳、白揚社、1995 年。
- 中谷巖『「AI 資本主義」は人類を救えるか』NHK 出版新書、2018 年。
- 西垣通『ビッグデータと人工知能』中公新書、2016 年。